

* 建永元年から承久三年の飛鳥井雅経詠—参加歌会・歌合の整理—

稲葉美樹

はじめに

稿者は、飛鳥井雅経の家集『明日香井集』を読み進めている。上巻はその作業をひとまず終え、現在は下巻について検討を行っている。『明日香井集』の構成を略記すると、上巻は、定数歌を、百首歌・五十首歌・その他の定数歌の順に、さらにそれぞれの中で詠作年次順に配列している。下巻は、前半に小規模な歌会・歌合歌を詠作年次順に並べ、後半に、四季・恋・雑から成る部類歌を収める。小規模な歌会・歌合歌のうちの前半部分に当たる、元久二年（一二〇五）の作までは昨年発表した拙稿で検討したので（注一）、本稿では後半部分、すなわち建永元年（一二〇六）から承久三年（一二二一）までの一六年間の作を対象とする。建永元年には雅経は三七歳、承久三年三月一日に五二歳で没する。この間の雅経の小規模歌会等の歌は、家集一一四九から一二九八までの一五〇首、および一六四一・一六七二の二首に、他の歌集などに所収されている一首を加えた一六三首となる。これらが詠作された歌会および歌合について整理したい。他の歌集収載歌については見落としもあるかと思うが、現在確認できた範囲で稿を進めたい。なお、記録類により参加が知られる行事でも、雅経歌が見いだせないものはここでは扱わない。また、この一六三首の和歌表現および、この時期の雅経

歌でも一六四一・一六七二を除く『明日香井集』下巻の後半部所収歌と、歌会・歌合歌以外は別稿で扱うこととする。

一 建永元年から承久三年の歌壇の状況

まず、本稿で扱う時期の歌壇の状況について、略述しておく（注二）。この一六年間は、歌壇の主催者によって承元年間（一二二〇）までの前半と、建暦年間（一二二一）以降の後半とに大別される。

前半は後鳥羽院歌壇の活動期であり、また元久二年（一二〇五）三月二六日に竟宴を終えた『新古今集』の切継時代でもある。しかし、承元二年（一二〇八）頃からは院の和歌への情熱は衰えていったと考えられ（注三）、承元三年には後鳥羽院主催と確認できる和歌行事はない。承元三年に雅経が参加している和歌行事も詳細不明の『長尾社歌合』一度だけである（注四）。『新古今集』の切継は翌承元四年に終了している。建暦二年からは順徳天皇が盛んに和歌行事を催すようになる。一方で、後鳥羽院主催の和歌行事も建暦二年以降再び見られるようになり、院がすっかり和歌から離れてしまった訳ではない。雅経は、後鳥羽院主催の和歌行事の大半に参加している（注五）。一方、順徳天皇主催の行事は天皇近侍の歌人が中心であ

ることが多かったため（注六）、半数弱の参加にとどまる。

二 和歌行事の整理

本稿で取り上げる作品は以下のとおりである。

『明日香井集』一一四九、一二九八・一六四一・	一六七二（注七）	一五二首
『賀茂別雷社歌合』		三首
『長尾社歌合』（『夫木抄』収載歌）		一首
『新羅社二首歌合』（『新三井集』収載歌）		一首
『内裏詩歌合』建保二年二月三日か（『夫木抄』収載歌）		二首
『月卿雲客妬歌合』建保三年六月一日（家集不載分）		二首
『右大將家歌合』		二首
以上計	一六三首	

以下、建永元年から承久三年に雅経が参加し、和歌が現存する四九度の和歌行事等について、知りえたことを述べる。ただし、紙幅の都合上、『新編国歌大観』（以下『大観』とする）に収録されているものは詳述せず、完本の現存しない和歌行事等を中心に扱う。便宜上、成立順に通し番号を振り、行事名の下に、主催者の別（後鳥羽院主催の行事は（院）、順徳天皇主催の行事は（順）と略称で示す）を付す。また参考のため、この間に雅経が詠作した定数歌等の名を、*を付して記す。なお、和歌行事名は、原則として『大観』に収録されているものは『大観』に従い、それ以外は『明日香井集』に記されている名を用いるが、他の歌集などを参照して適宜わかり

やすく改めた。

1 高陽院歌合（院） 建永元年正月一日（家集一一四九）
題は「庭花春久」。後鳥羽院の御所高陽院で行われた。他の歌人作が知られるのは、後鳥羽院（『後鳥羽院御集』一六七二。以下『御集』とする）、藤原定家（『拾遺愚草』二五三）である。

2 院当座歌合（院） 建永元年七月二三日（家集一一五〇、一一五二）「湖辺月」「暮山雲」「行路風」の三題。他の歌人で作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一六七九、一六八二）、定家（『拾遺愚草』二二七一・二三〇二・二六八二）、藤原家隆（『壬二集』二四六五・二九五三）。「壬二集」三〇〇二も、蓬左文庫蔵本を底本とする『大観』では詞書が「建永元年仙洞にて当座歌合」であるが、高松宮旧蔵本を底本とする『私家集大成』の詞書では「暮山雲」と題が記されており、この時の作と判断される。また、『雲葉集』九六〇「当座歌合侍りけるに、行路風」の詞書の藤原秀能歌もこの時の作か。

3 卿相侍臣歌合（院） 建永元年七月二五日（家集一一五三、一一五五）『大観』五卷二〇四。「朝草花」「海辺月」「羈中暮」の三題。雅経は俊成卿女と番えられ、二勝一負。有吉保氏に詳しい論考がある（注八）。なお、評定後に三題の当座歌会があったが、雅経歌は見いだせない。

4 院当座歌合（院） 建永元年七月二八日（家集一一五六、一一五八）「寄風懷旧」「雨中無常」「被忘恋」の三題。藤平泉氏に詳しい論がある（注九）。他の歌人で作が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一六八二、一六八四）、定家（『拾遺愚草』二五六二、二八六一、二八六二）、家隆（『壬二集』二八一五・三〇三三・三〇三四）、秀能（『如願法師集』六五〇・六五三・六五七）。「新古今集」恋五、一三

二三〇一三三六は、「被忘恋の心を」の詞書で後鳥羽院・定家・家隆・俊成卿女の作が収められているが、始めの三首はこの歌合の歌であり、俊成卿女歌（『俊成卿女集』二〇三）も同様であろう。また、『新古今集』雑上、「寄風懷旧といふことを」の詞書の、一五六四（源通光）・一五六五（俊成卿女）『俊成卿女集』一九九もこの時の作と思われる。

5 卿相侍臣嫉妬歌合（院） 建永元年八月一日（家集一一五九〇一六二）『明日香井集』には八月とのみ記されているが、『明月記』により八月一日に催されたことが知られる。寺田純子氏が「前月七月二五日の卿相侍臣歌合の雪辱戦として行われた歌合であろう。」とされる一方、藤平泉氏は「七月二十八日の『歌合』の負方が再度挑んだとも考えられるが、内容的に二つは整合しないようであり」とされる（注一〇）。述懐三首。『新古今集』一九五七〇一七六四に八首一括して収められており、慈円・源通具・定家・家隆・俊成卿女の参加が知られる。このうち、一七六三は『明日香井集』一一五九歌である。ほかに、『御集』一六八六〇一六八八、『拾遺愚草』二七〇五〇二七〇七により、後鳥羽院・定家の全歌が知られる。また、『如願法師集』八五六・八六〇もこの時の作かと思われる。

6 鳥羽殿御会（院） 建永元年八月五日（家集一一六二）題「庭上月」。他の歌人で作が知られるのは後鳥羽院（『御集』一六八五）のみ。『明月記』により雅経が講師を務めたことが知られるが、定家歌は伝わらない。

7 院御会（院） 承元元年正月二二日（家集一一六三）和歌所で行われた歌会。題「春松契齡」。他の歌人で作品が知られるのは後鳥羽院（『御集』一六八九）『新統古今集』七四五）のみ。『御集』の詞書は「承元二年」とするが、『新統古今集』の「承元元年」が正

しいと思われる。

8 鴨御祖社歌合（院） 承元元年三月七日（家集一一六四〇一六六）『大観』五卷二〇五。「山家朝霞」「湖辺夕花」「社頭述懐」の三題、無判。下鴨神社に奉納された。次の「賀茂別雷社歌合」と一対。

9 賀茂別雷社歌合（院） 承元元年三月七日（家集になし）『大観』五卷二〇六。「海辺帰雁」「暮山春雨」「社頭夜風」の三題、無判。

* 『最勝四天王院障子和歌』承元元年六月頃詠進か。

10 和歌所歌会（院） 承元二年閏四月四日（家集一一六七〇一六九）『明日香井集』では「同御会」となっているが、「同」が何をさすのかわからない。「雨中郭公」「遇不遇恋」「寄述懐雑」の三題。他に作品が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一六九九〇一七〇一）、定家（『拾遺愚草』二二二四「雨中郭公」、二五五六「遇不遇恋」）のみ。

11 住吉社歌合（院） 承元二年五月二九日（家集一一七〇〇一七二）「寄月祝」「寄旅恋」「寄山雑」の三題。他に作が知られる歌人は、後鳥羽院（『御集』一六九六〇一六九八、ただし、「同」承元二年三月」と記されている）、慈円（『拾玉集』四二二〇四二二九、「寄旅恋」は四首、「寄山雑」は三首あり、合点を付した三首のほかは擬作であると記されている）、家隆（『壬二集』二八一六・二九二六・三〇四三）、定家（『拾遺愚草』二四九七・二七一四・二五七二）は詞書「住吉歌合、旅宿恋」で、題がやや異なるがこの時の作か）、秀能（『如願法師集』六七六「寄月祝」）、宜秋門院丹後（『新統古今集』一三三八「寄旅恋」）、藤原家衡（同前、一三三九）。『御集』一六九八は、『新古今集』に切り入れられた、著名な「おく山の

おどろがしたもふみわけて道有る世ぞと人にしらせん」(卷一七、雑中、一六三五)。

12 長尾社歌合(不明) 承元三年(家集になし) 散逸しており、詳細は不明。長尾社については、西澤誠人氏は「石清水社系の祠宇であろう」とされ、辻勝美氏は「下醍醐にある長尾天満宮」と推定されている(注一一)。「夫木抄」一六四七・一六五九、一六六八・一一四三八・一二一九二(以上題は「海辺帰雁」・一四九九七・一四九九九(以上題は「社頭花」・一六二二四(「社頭桜花」)の二〇首が知られ、『続門葉集』により一首を補うことができる(七四「社頭花」)。他に『夫木抄』と重複する二首がある。従って、「社頭花」「海辺帰雁」の二題か。雅経歌が『夫木抄』一六四九に見られる。定家・家隆・秀能・源光行・藤原行能らのほか、顕昭・家衡・知家・保季ら六条家の歌人も多く参加している。この歌合の参加歌人については辻氏論文に詳しい(注一二)。「拾遺愚草」一二五〇歌(「海辺帰雁」)もあるいはこの時の詠か。なお、『続門葉集』では催行年次が建暦元年となっており二年の差があるが、このことについて久保田淳氏は「このずれは結構と披講との時間的開きによるものかもしれない。」とされる(注一三)。

13 河崎会(不明) 承元四年八月二日(家集一一七三) 題は「雨中草花」。他に作品が知られるのは後鳥羽院のみ(『御集』一七〇二)で、日付と題のみ記す。寺島恒世氏は「河崎泉亭において催された歌会か。」とされる(注一四)。「明日香井集」では河崎の地名は一三六二の詞書にも「(略)鳴欄宜祐綱が河崎の泉へまかりて待りければ(略)」と見える。

14 粟田宮歌合(院) 承元四年九月二日(家集一一七四・一七六)「寄海朝」「寄山暮」「寄月恋」の三題。他に作が知られる

のは、後鳥羽院(『御集』一七〇三・一七〇五)、定家(『拾遺愚草』二五五七・二七一〇・二七一二)、慈円(『拾玉集』四三八六・四三九〇、「寄海朝」二首、「寄山暮」三首。四三八一・四三八二は歌合名は記されていないが、題は「寄月恋」で、あるいはこの時の作か)、家隆(『壬集』二八二七・三〇〇三・三〇〇四)、秀能(『如願法師集』八三三「寄海朝」・六〇八。六〇八は題は記されないが、「寄月恋」であろう)、藤原忠経(『新千載集』一五五六「寄月恋」)。また、久保田淳氏が指摘されるように(注一五)、『十訓抄』十一三四に見られる源家長歌もこの時の作である。

15 新羅社二首歌会(不明) 承元四年一〇月(家集一六四一?・『新三井集』三〇八) 散逸しており詳細は不明。呼称は辻氏論文による(注一六)。「新三井集」により、二七九・二八六(題は「社頭菊」)、三〇七・三二二(題は「薄暮時雨」)の一四首が知られる。うち、三〇八が雅経歌。また、『明日香井集』に「承元四年新羅祭の次に、社頭残菊といふことをよみ侍りけるに」の詞書で収められる一六四一歌も、この時のものであろう。ほかに、家長・藤原為家・藤原有家・保季らの参加が知られる。

16 建暦元年閏正月四日、庭雪跡といふ題を賜てよみ侍りける(家集一一七七) 他に同じ題の歌は見られず、詳細不明。

17 大内花下庇製(院) 建暦二年二月二五日(家集一一七八・一一八〇)「明日香井集」・『御集』は二五五とするが、『玉藻』では二七五とする。他に作品が知られるのは、後鳥羽院(『御集』一七〇六・一七〇八)、源定通(『新勅撰集』一〇四)のみ。吉野朋美氏は、この時の院の作を検討し、この年が藤原良経七回忌の年にあたるところから、良経を追想する心情により、院が歌壇活動を再開したのではないかとされる(注一七)。

18 内裏詩歌合(順) 建暦二年五月二日(家集一一八・一八六)「山居春曙」(『紫禁集』のみ「山居春曉」)「水郷秋夕」(『羈中眺望』の三題各二首。他の歌人で作品が知られるのは、順徳天皇(『紫禁集』八五・九〇)、定家(『拾遺愚草』二一四八・二一七六「山居春曙」、『定家卿百番自歌合』七四「題はないが「水郷秋夕」か」、一八九・一九〇「題はないが「羈中眺望」か」、慈円(『拾玉集』四一七二・四一九二、「山居春曙」五首、「水郷秋夕」六首、「羈中眺望」一〇首)、家隆(『壬二集』二〇七九・二〇八〇・二四六七・二四六八・二九五六・二九五七)、藤原範宗(『範宗集』一六「山居春曙」、二六六・二六七「水郷秋夕」、六三八・六三九「羈中眺望」、藤原頼実(『新勅撰集』九三「山居春曙」・五三三「羈中眺望」・通光(『続千載集』三七四「水郷秋夕」・『万代集』三四五三「羈中眺望」)。順徳天皇歌壇初度の内裏詩歌合で、唐沢正実氏は、これが「詩歌合盛行のきっかけとなったと思われる」とされるが、「実質的な主催者は後鳥羽院であった」ことを指摘されている(注一八)。

19 松尾社歌合(院) 建保元年(一一二二)七月十七日(家集一一八七・一一八九)「初秋風」「山家暮」「杜頭雑」の三題。『御集』によると、無判。他の歌人で作品が知られるのは、後鳥羽院(『御集』一七〇九・一七一・一七一)、慈円(『拾玉集』四一六・四一一八)、定家(『拾遺愚草』二二三三・二六九六・二七一五)、秀能(『如願法師集』四七〇・四七一・八九四)。「範宗集」六五五「杜頭雑」もあるいはこの時の作か。ただし、他の歌題の歌は見られない。

20 内裏歌合(順) 建保元年八月七日(家集一一九五・一一九七)「大観」一〇巻五八。「山暁月」「野夕風」「河朝霧」の三題。無判。なお、『明日香井集』では、ここから一二四〇歌まで、配列に誤りがある。この歌合の年次は「同三年」となっており、これは一一

八七「松尾社歌合」の「建保元年」を受けるため建保三年というところになってしまいが、正しくは建暦三年(二月六日に建保と改元)であり、一一九〇の前に配されるべきである。なお、この中でさらに細かい配列の誤りがあるが、個々の和歌行事について扱う際に述べる。

21 内裏歌合(順) 建保元年九月二三夜(家集一一八・一二〇〇)「大観」一〇巻六〇。「江上月」「旅宿恋」「暮山松」の三題。判・判詞とも伝わらない。

22 内裏歌合(順) 建保元年閏九月十九日(家集一二〇一・一二〇三)「大観」五巻二〇九。「深山月」「寒野虫」「寄風雑」の三題。雅経は順徳天皇と番えられており、三番とも負けている。

23 和歌所当座歌合(院) 建保元年一〇月一四日(家集一二〇四・一二〇八)『御集』によると、水無瀬殿で行われた当座歌合。『御集』には一二月一四日と記されており、どちらが正しいかは不明。「冬月」五首。他の歌人で作品が知られるのは、後鳥羽院(『御集』一七二・一七二六)、家隆(『壬二集』二五七二・二五七六)、秀能(『如願法師集』五六六)。

24 内裏詩歌合(順) 建保二年二月三日(家集一二四〇・「夫木抄」五六〇・一四七〇)「野外霞」「河上花」の二題各二首。『明日香井集』では年次が記されず、建保三年の「月卿雲客妬歌合」(行番号31)の次に配されている。しかし、一二四〇歌は、武藤康史氏が指摘されるとおり(注一九)『新千載集』に入集しており(巻一、春上、九)、その詞書は「建保三年内裏詩歌合に、野外霞」であるが、建保三年には内裏詩歌合の催行は確認されず、題は建保二年二月三日の内裏詩歌合と一致しているため、この時のものと考えられる。また、『夫木抄』五六〇は五九九歌の詞書「建保二年内裏詩歌

合、野霞」を受けるが、五九九はこの時の作である『紫禁集』三三七歌と同一であるため、雅経の五六〇歌もこの時の作と考えられる。『夫木抄』一四七〇の詞書では「建仁二年内裏詩歌合」となっているが、建仁二年に内裏詩歌合が催行されたことは確認できず、やはりこの時の作であろう。他の歌人で作品が知られるのは、順徳天皇（『紫禁集』三三四～三三七）、定家（『拾遺愚草』一二四四・一二四五・一二七三・一二七四）、家隆（『壬二集』二〇八一～二〇八四）、為家（『夫木抄』一一九二「河上花」、俊成卿女（『夫木抄』一一九四「河上花」、藤原忠信（『夫木抄』九九四四「野外霞」）。『範宗集』五・六（『野外霞』）、一二・二三（「河上花」）も、年次や行事の名は記されていないが、題が一致し、二首ずつ見られることから、この時の作と考えられる。なお、『明月記』によるとこの後「庭上柳」題で、当座の歌会があったようであるが、『明日香井集』には見られない。

*『百日歌合』建保二年七月二五日 歌合とあるが他の歌人の歌を見いだせず、私的な百首歌と考えられる。

- 25 秋十首撰歌合（院） 建保二年八月二五日（家集一二三四～一二二九） 水無瀬殿で催された。他の歌人で作品が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一七一九～一七二八）、定家（『拾遺愚草』二三七四～二三八三）、家隆（『家隆卿百番自歌合』五三・五五・五七・六二・六三・六八・七〇）、『統後撰集』三七八）、秀能（『如願法師集』五〇六～五一〇）、家長（『統拾遺集』六一七）、通光（『統拾遺集』三〇三・『新統古今集』三六〇・『宗尊親王三百首』一二三番の評中）。『範宗集』二五四～二六二（詞書「秋十首中に」）もこの時の作か。
- 26 内裏秋十五首歌合（順） 建保二年八月二六日（家集一二〇九～一二二三）『大観』五卷二一〇。「秋風」に始まり、「秋雑」に

終わる、いずれも秋にちなむ一五題。田尻嘉信氏・福留温子氏に論文がある（注二〇）。家集では25と順序が入れ替わっている。雅経は、家隆・定家・順徳天皇らと番えられ、七勝一負七持。

- 27 当座御会（院） 建保二年九月三日（家集一二三〇・一二三一）「暁山」「夜恋」の二題。他に作品が知られるのは、後鳥羽院（『御集』一七二九・一七三〇）のみ。

28 院御会（院） 建保二年九月一四日（家集一二三二） 題は「月契多秋」。他に作が知られるのは後鳥羽院（『御集』一七三二）のみ。

- 29 月卿雲客歌合（順） 建保二年九月二九日（家集一二三三～一二三五）「野径月」「寄雲恋」「霧中雁」の三題。『紫禁集』『和歌合略目録』では九月二五日とする。他に作が知られるのは、順徳天皇（『紫禁集』四一一～四一三三）。「夫木抄」九七六九「家集、野径月」という詞書をもつ家長歌もあるいはこの時のものか。

- 30 月卿雲客妬歌合（順） 建保二年九月三〇日（家集一二三六～一二三八）『大観』五卷二二一。「河落葉」「寄鳥恋」「深山雨」の三題。雅経は順徳天皇と番えられ、三番とも負けている。松井律子氏に論文がある（注二一）。

- 31 院四十五番歌合（院） 建保三年六月二日（家集一一九〇～一一九四）『大観』五卷二二二。「春山朝」「夕早苗」「行路秋」「暁時雨」「松経年」の五題。雅経は通光と番えられ、一勝四持。この歌合については、吉野朋美氏・佐々木孝浩氏に詳しい論考がある（注二二）。また、『吾妻鏡』同年七月六日の条に「坊門黃門^{忠朝}被進去六月二日仙洞哥合^{衆議}。一巻於將軍家。是依内々勅定也云々。」とあり、將軍源実朝に贈られたことが知られる。さらに、実朝の御台所の兄である坊門忠信がこの歌合に参加して、五勝していることから、目崎

徳衛氏は「この歌合の企画そのものが遠い実朝を念頭に置いて仕組まれたようである。」とされている(注二三)。吉野氏は、歌人構成・歌題の設定・和歌内容・判を詳細に検討された上で「本歌合が、贈る段階だけでなく、企画から付判にわたっても実朝懐柔の意図が強く反映している」とされ(注二四)、出詠者たちもそのことを心得ていたと述べられている。

32 月卿雲客妬歌合(順) 建保三年六月一日(家集一二三九・歌合本文一五・二二)『大観』一〇巻六二。「野外夏草」「月色似秋」「契経年恋」の三題。『明日香井集』には「野外夏草」一首のみ収める。判・判詞はない。

33 内裏歌合(順) 建保三年六月一日(家集一二四一〜一二四六)「水辺柳」「江上霞」「朝落花」「夜帰雁」「山晚風」「野曉月」の六題。『明日香井集』では「六月日」となっているが、『紫禁集』により一八日に催行されたことがわかる。他に作が知られるのは、順徳天皇(『紫禁集』五五七〜五六二)、定家(『拾遺愚草』二二四一・二二四三・二二四九・二二七五・二六九七・二六九八)、家隆(『壬二集』二〇八五〜二〇八八・三〇二一・三〇二二)、範宗(『範宗集』五三〜五五。ただし、「同[建保三年]三月内裏御会」と記されている。また五三の題は「水辺柳」、五五の題は「朝落花」であるが、五四の題は「山桜」で、内容的にもこの歌合のいずれの題とも合致しない)、通光(『新拾遺集』一四九「朝落花」、西園寺実氏(『雲葉集』七一「江上霞」、藤原康光(『続後撰集』一一一五「野曉月」・『雲葉集』一七〇「朝落花」)。

* 『建保四年院百首』 二月頃までに詠進したか。

34 内裏百番歌合(順) 建保四年閏六月九日(家集一二四七〜一二五六)『大観』五巻二三。「春」「夏」「秋」「冬」「恋」の五題

各二首。雅経は兵衛内侍と番えられ、四勝一負五持。

35 熊野詣路次当座和歌(院) 建保四年八月廿日(家集一二五七〜一二六一)『明日香井集』では九月廿日となっているが、岩橋小彌太氏・田村柳壺氏が述べるとおり、『御集』に記載されているように八月が正しい(注二五)。題は、『明日香井集』では「山花」「山夕」「山月」「山曉」「山旅」であるが、『御集』では「春山花」「夏山夕」「秋山月」「冬山曉」で五首目は題を欠いている。他に作が知られるのは、後鳥羽院(『御集』一七三七〜一七四二)のみ。

36 嵯峨殿庚申当座歌会(院) 建保四年一〇月一日(家集一二六二) 題は「山花落葉」。他に作品が知られるのは、後鳥羽院(『御集』一七四二)のみ。なお、武藤氏は「年月無記ながら一三九九〜一四〇〇もあるはこのときの作か」とされる(注二六)。

37 内裏御会(順) 建保四年一月一日(家集一二六三〜一二六五)「寒山月」「遠村雪」「寄葦恋」の三題。『明月記』同日条によると、雅経は講師を務めた。他に作が知られるのは、順徳天皇(『紫禁集』九二〜九二三)、定家(『拾遺愚草』二四四四・二四四七・二五七〇)、家隆(『壬二集』二五九七・二五九八・二八三三)。

38 院庚申御会(院) 建保五年四月一日(家集一二六六〜一二七〇)「春夜」「夏曉」「秋朝」「冬夕」「久恋」の五題。『明月記』同日条によると、雅経は出座はしなかった。他に作品が知られるのは、後鳥羽院(『御集』一七四三〜一七四七)、定家(『拾遺愚草』二一七〇・二二一九・二三九一・二四七一・二五六二)、家隆(『壬二集』二〇四二・二二九〇・二三九六・二六二二・二八一五)、慈円(四〇四一〜四〇四七、「久恋」は三首存する。また、『雲葉集』に「仙洞にて庚申夜五首歌かうぜられけるに、秋朝を」の詞書で収められている六七一歌は、家集に見られる歌と一致しない)、秀能(如

願法師集』三八四・四三九・五三八・五五一・六〇〇）、範宗（『範宗集』六一「春夜」・一七七「夏曉」・四四〇「冬夕」・五七五「久恋」・三三五「秋朝」もあるいはこの時の作か）、通光（『統後撰集』一〇三「春夜」、『続千載集』一二四六「久恋」、頼実（『新勅撰集』三〇八「秋朝」、家長（『新勅撰集』七四七「久恋」、藤原公経（『風雅集』八三五「冬夕」、藤原公経（『秋風集』二九八「秋朝」。

39 右大將家歌合（通光） 建保五年八月一日（家集になし）
『大観』一〇巻六六。「虫声驚夢」「曉惜別恋」の二題。雅経は秀能と番えられ、一勝一持。

40 右大臣家歌合（九条道家） 建保五年九月（家集一二七一・一二七六）『大観』五巻二二四。「夜深待月」「故郷紅葉」「河辺搗衣」「行路見恋」「山家夕恋」「羈中松風」の六題。雅経は道家・定家らと番えられ、三勝一負二持。

41 冬題歌合（順） 建保五年十一月四日（家集一二七七・一二八三）『大観』五巻二二五。「冬山霜」「冬野霰」「冬関月」「冬河風」「冬海雪」「冬夕旅」「冬夜恋」の七題。雅経は道家と番えられ、二勝二負三持。

42 建保六年八月中殿御会（順）（家集一二八四・一六七二）『大観』一〇巻一三六。八月一日に清涼殿で催された。題は「池月久明」。ただし、雅経歌には問題がある。次に示すように、家集にこの時の作として異なる二首が収められているのである。

同御会同六年八月十一日

池月久明

一二八四 いけみづに千世はまかせつひさかたのくもるの月の
かげもはるかに

建保六年八月十三日中殿宴に、池月久明といへることを

一六七二 いけ水にいほたらんざされ石のかずもあらはに
すめる月影

このうち、歌会の本文と一致するのは一六七二歌で（ただし、第四句は歌会本文のみ「かずもあらはす」、『続古今集』に入集している（巻二〇、賀、一八七七）ほか、『万代集』にも見られる（三七七七）。ところで、『明月記』には、七月二十九日からこの御会に関する記事が見られる。すなわち、前日に作者が定められたとし、その名を記している。八月一二日条には「人々歌少々、唯今送之、右武衛衛宜由答了」と見え、雅経（右武衛）らが定家に詠歌を見せており、雅経歌が評価されていることが知られる。このことから推測して、一二八四歌の詞書が一日となっているのは、詠作した日付を記したのではないだろうか。その時点で雅経は複数の歌を詠んでおり、一二八四は不採用とした作が誤って収められたものではないか。なお、一六七二は、『明日香井集』の巻末歌である。『明日香井集』の構成ははじめに略記したが、実は末尾には若干の乱れがあるように思われる。雑部は、はじめに羈旅歌を約九〇首収めた後、述懐歌・贈答歌・釈教歌などを並べた後、隠題二首、折句一首を置くという構成をとっている。ところが、折句の後、四季歌六首、雑歌一首が配され、その次に一六七二歌が配されている。この計八首の存在は不自然で、撰者である飛鳥井雅有が行ったのか否かは判断できないが、増補である可能性が高いように思われる。そうであるならば、『中殿御会』歌が家集に存しないことに気づいた誰かがここに置いたのではないかと考えられる。

43 同一〇月二日(不明) (家集一二八五・一二八六)「同」は建保六年。「社頭暁月」「禁中翫月」の二題。ほかにこの題の歌は見いだせず、詳細不明。

*『道助法親王家五十首』建保六年頃下命、承久二年までに詠進か。

44 内裏御会(順) 承久二年二月二三日(家集一二八七・一二八八)「春山月」「野外柳」の二題。他に作が知られる歌人は、順徳天皇(『紫禁集』一一七三・一一七四)、定家(『拾遺愚草』二七四六・二七四七)、家隆(『壬二集』二〇九四・二〇九五)、範宗(『範宗集』七七・七八)、藤原光経(『光経集』四九・五〇)、道家(『夫木抄』四九九「春山月」)。この時の定家の野外柳詠が後鳥羽院の逆鱗に触れたことは有名である。

45 内裏御会(順) 承久二年八月十五夜(家集一二八九・一二九二)「待月」「見月」「惜月」の三題。他に作が知られる歌人は、順徳天皇(『紫禁集』一一八九・一一九二)、家隆(『壬二集』二四八四・二四八六)、範宗(『範宗集』三五二・三五四)、光経(『光経集』六三・六五)、知家(『続古今集』三八四「待月」)。慈円の『拾玉集』四七七・四七八〇歌も、詠作年次の記載はないが歌題が一致しており、この時の作か。各題二首ずつある。

46 内裏御会(順) 承久三年二月二日(家集一二九二・一二九三)「春風」「春雨」の二題。『明日香井集』には日付が記されていないが、『光経集』による。他の歌人で作が知られるのは、家隆(『壬二集』二〇九六・二〇九七)、光経(『光経集』六六・六七)、藤原基良(『万代集』二七七四「春雨」)。

47 春日社歌合(順) 承久三年三月七日(家集一二九四・一二九六)「野花」「海霞」「述懐」の三題。雅経が没するわずか四日前

に行われた。他の歌人で作が知られるのは、定家(『拾遺愚草』二一八五・二一八六・二七二二)、範宗(『範宗集』七二「海霞」・七三「野花」)。定家は籠居中であつたため、詞書によると「内よりしるびてめされし(略)」という状態であつた。

48 左大将歌会に(不明) (家集一二九七)「庭上松」。他の歌人の作が見られず、詳細は不明。次の49は後述するように建暦元年の作かと考えられ、47が没する直前の行事であることを考えると、この歌会の催行年次は47よりも前であろう。48・49は増補されたものか。催行年次が不明であるため、左大将が誰であるかも確定はできないが、雅経が京都で和歌活動を開始してから左大将を務めたことのある人物は、藤原家実・道家・源実朝・藤原家通の四人であり、最も可能性が高いのは道家であろう。道家の左大將在任期間は、建永元年六月一六日(建保六年二月二六日であるが、建暦二年六月二九日に内大臣に任じられるまでの六年間に行われたものか。

49 日吉禰宜親成七十賀し侍りけるにのみてつかはしける(家集一二九八) 他に定家(『拾遺愚草』二五三〇)、家隆(『壬二集』二九三七)に同じ時の和歌と思われるものがある。親成は、久保田淳氏が述べるとおり、祝部親成で、『明月記』寛喜二年(一二三〇)一〇月二日条によると、その前々日に八九歳で没しており、七十賀が行われたのは、建暦元年かと思われる(注二七)。

まとめ

以上、建永元年から雅経が没する承久三年までの、雅経の詠が知られる和歌行事の整理を行った。雅経は正治二年に後鳥羽院歌壇に加えられ、以後元久二年まで後鳥羽院主催の和歌行事の大半に参加

していることは前稿で述べたが、催行された和歌行事の回数は減っているがそのほとんどに参加する状態は没するまで続いたことが知られる。一方で、建暦年間には順德天皇が歌壇活動を開始し、雅経はそこにも参加することになる。しかし順德天皇歌壇は、後鳥羽院歌壇の時代に活躍した歌人も加えられることがあるものの、順德天皇近侍の人々が中心であったため、不参加の行事も多い。前稿で扱った和歌行事四五回が、正治二年（一一〇〇）から元久二年までの六年間に行われたものであったのに対し、本稿の和歌行事四九回が一六年間に行われたことを考えると、その差は歴然としている。ただし、その中には建保三年一〇月二四日に行われた『内裏名所百首』のように、都に不在であったために参加が不可能であったケースもある。この時期、雅経はおそらく順德天皇の命により鎌倉へ下っていたことが、家集一四八五～一五三七により知られるのである。

一方、承久元年には、定家や家隆が参加している順德天皇主催の行事が複数あるにもかかわらず、雅経は一度も参加しておらず、現時点ではその理由は不明である。承久元年の雅経詠で現在知られるのは、中将忠嗣（注二八）室である雅経女が六月ごろから患い、七月九日に一三歳で没する前後の二六首のみである。

注

- 一 「正治二年から元久二年の飛鳥井雅経詠」（『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第三九集、二〇〇八年）。
- 二 藤平春男氏『藤平春男著作集 第1巻 新古今歌風の形成』「第一章IV建保期歌壇の性格」（笠間書院、一九九七年）に詳

しい。

- 三 吉野朋美氏「建暦二年の後鳥羽院」（『国語と国文学』第七八巻第一〇号、二〇〇一年一〇月）など。
- 四 ただし、『明日香井集』下巻の後半部には、雅経の家会での作が収められており、その中には承元三年のものも存する。
- 五 藤平春男氏注二著書中の「新古今時代歌壇出詠歌人索引」によれば、本稿で扱う時期の後鳥羽院主催の行事一九回中、雅経が参加していないのは三回、『御集』に載る行事では、二五回中参加が確認できないのは二回。
- 六 藤平春男氏注二に同じ、杉山幸志氏『内裏名所百首』以前の順德院歌壇について「順德院近侍の歌人を中心として」（『立教大学日本文学』第七三号、一九九四年二月）など。
- 七 和歌は本文および歌番号ともCD-ROM版『新編国歌大観』により、CD-ROM版『私家集大成』を適宜参照した。
- 八 『新古今和歌集の研究基盤と構成』（三省堂、一九六八年、二五四～二五六ページ）。
- 九 「建永元年七月『和歌所当座歌合』前後」（『神女大國文』第一〇号、一九九九年三月）。
- 一〇 寺田氏「和歌大辞典」、藤平泉氏注九に同じ。
- 一一 西澤氏「顕昭致一仁和寺入寺をめぐる」（『和歌文学研究』第二八集、一九七二年六月）、辻氏「承元三年長尾社歌合の出詠歌人について」（『語文』第九九輯、一九九七年二月）。
- 一二 辻氏注一一論文。
- 一三 『藤原家隆集とその研究』（三弥井書店、一九六八年、四八四ページ）。
- 一四 和歌文学大系『後鳥羽院御集』（明治書院、一九九七年、三〇

〇ページ)。

五 注一三著書、四八五ページ。

六 注一一辻氏論文。

七 注三に同じ。

八 「順徳天皇内裏における詩歌合の盛行について」(『語文』第六五輯、一九八六年六月)。

九 「藤原雅経年譜」(『三田国文』第二号、一九八四年三月)。

二〇 田尻氏「建保二年八月十六日『内裏秋十五首歌合』について」(『跡見学園国語科紀要』一三、一九六五年三月)、福留氏「建保二年八月十六日『内裏秋十五首歌合』の判詞—定家の古歌撰取(本歌取)評の理念と隠名の検討—」(『平安文学研究 生成』、笠間書院、二〇〇五年)。

二一 「月卿雲客妬歌合」攷(『就実語文』第二〇号、一九九九年一月)、『月卿雲客妬歌合』考—家隆の判歌をめぐって—(『就実語文』第二二号、二〇〇一年一月)。

二二 吉野氏「後鳥羽院の実朝懐柔と和歌—建保三年『院四十五番歌合』について—」(『古代中世文学論考』第二二集、新典社、二〇〇四年)、佐々木氏「中世歌合諸本の研究(八)—『歌合 建保三年六月二日』について・附校本—」(『斯道文庫論集』第四〇輯、二〇〇五年)。

二三 『史伝後鳥羽院』(吉川弘文館、二〇〇一年、一三六ページ)。

二四 吉野氏注二二に同じ。

二五 岩橋氏「熊野懷紙について」(『書道全集』第一八巻、平凡社、一九六六年)、田村氏「後鳥羽院熊野御幸当座歌会歌本文集成」(『古典論叢』第二六号、一九九七年一〇月)。

二六 注一九に同じ。当該箇所を示す。

嵯峨の卿二品の第へ御幸なりて、しばらく御所にてありけるに、清範が御ともにさぶらひけるに、小袖つかはすとて

いにしへはちるもみちばをきるといふあらしのやまもいまはおもはず

返し

もみぢきしきんたうのきみにくからずかかこそでもあらしやまには

二三 『藤原定家全歌集 上』(河出書房新社、一九八五年、三九八ページ)。

二六 忠嗣という名の人物は多いが、雅経女の年齢から考えて、大炊御門師経(安元元年(一一七五)—正嘉三年(一二五九)男(左中将、正四位下)か、師経の弟家宗男(中将)のいずれかか。

* A Study of Masatsune Asukai's waka (from the 1st year of Ken ei to the 3rd year of Jokyu)

** Miki Inaba (Japanese Language and Literature)

キーワード 飛鳥井雅経 『明日香井集』 歌合 歌会